

## 北西季節風

志村 良知

秋も深まると日照が極端に短くなるシベリアの気温は下がり、冷たく密度が大きな空気は大陸高気圧となる。ここから吹き出す風は寒冷乾燥であるが、日本海上空を通過する間に海面から水蒸気を吸い上げ、寒冷湿潤になって日本列島の脊梁山脈に衝突して上昇し、積乱雲を発生する。

この積乱雲の高度はせいぜい四千mで脊梁山脈の高い場所では越えることなく湿度を雪として放出し、再び寒冷乾燥の風となって関東地方などに吹きおろす。関東平野での風向は北ないし北西で、三陸沖に低気圧がある西高東低の冬型気圧配置が強いときは風速二十mを超える。

海に出て木枯らし帰るところなし 山口誓子

この句は伊勢で詠んだとされるので、海は太平洋である。平野を吹き抜けて太平洋に出た木枯らしはどうか。海上では風は等圧線に直角になる傾向があり、北西ないし西風になって海から水蒸気を吸収し筋状の雲を形成して吹きまくる、しかし、そこでの人間の営みは薄いので帰る処なしですまされてしまう

江戸時代には強い季節風下での大火事が何度もあった。名物、江戸の火事では風が強いと「一っ町内や二っ町内はあつ」という間、庶民は火事で焼け出されることをある程度覚悟して暮らしていた。

昭和二十年三月十日の東京大空襲も強い季節風の下で行われた。この日は陸軍記念日で米軍はこの日を選んで空襲をかけたという都市伝説がある。実際には米軍は列島周辺の気象観測により冬型気圧配置で強い北西季節風が吹く日を十日間以上も待つての出撃だった。

米軍は、季節風下の江戸の大火の延焼状況や関東大震災時の火災旋風の研究、さらに実際に木造家屋群を作つて焼夷弾爆撃の実験を入念に行っていた。そして、強風下で壊滅的な大火災を起こせる爆撃コース、高度、投弾方法を編み出していた。

この民間人の大虐殺計画を米軍上層部は熟知していた。九日夜の出撃は現場指揮官ルメイ将軍の独断であったが、この後原爆投下までいく上層部の反応は賞賛だった。